

慈濟 250 ものがたり

慈濟基金會
2017 年 10 月

TZU CHI ● ツーチー



表見返し ●

文・證嚴法師/訳・済運/撮影・李白士

衆生を利する

正念で思慮すれば
是非を見分けられ
心身が安らかで楽になれば
憂いはなくなります。
見返りを求めず
平等に愛を施し
衆生を利すれば
福德となります。





慈済は専門の科学技術者を動員し、「慈悲済世テクノロジー」の研究開発に共に取り組む。災害支援車、浄水ユニット、キッチンカー、折り畳み福祉ベッドなど役に立つ様々な製品を作り上げた。これらの製品の開発によって、災害時の緊急のニーズに応えることができ、台湾の災害支援を国際社会へ広げていくことに貢献している。

目次

【社論】

科学技術に人間性の輝きをプラスする

慈願／訳 4

【主題報道】

慈悲×テクノロジーで台湾の災害支援を創造

高嶋由紀子／訳 8

災害救助の前線に赴く深夜食堂

高嶋由紀子／訳 16

ハイテクキッチンカー

閻麗妮／訳 34

私利私欲のない無上の宝

【慈済月刊・慧命を守護して五十年】

大愛ラジオ局より祝福を

黒川章子／訳 38

【台湾の慈済】

医師の対話

慈願／訳 46

【国際の慈済】

貧と病

慈願／訳 52

牧童の涙

心嫻／訳 62

【お板さんが法の香に浸る】

小事は大事

葉美娥／訳 66

【證嚴法師のお諭し】

この世に広く願をかけ、安らかに楽しく行おう

慈願／訳 70

【納履足跡】

権利より愛を

性和／訳 82

【特別報道】

笑顔を取り戻した観音様

済運／訳 88

慈済大事記【九月】

済運／訳 104

科学技術に人間性の輝きをプラスする

現代人は科学技術の発達によって利便性を享受していますが、科学技術はだんだんと人間の機能に取って代わりつつあります。アップル社CEOのクック氏は今年六月にマサチューセッツ工科大学の卒業式で講演した時、人工知能によってコンピューターが人間と同じように思考することには心配していないが、人類がコンピューターのようになって、人としての価値観や共感する心に欠けるようになることが心配だと話しました。

彼が心配するのには訳があります。「水は船を浮かべることも転覆させることもできる」と言われるように、科学技術の発明は人類の生存能力を高めると共に、労力の節約やより緻密な文明を創出することを可能にしました。しかし、他方では、人類が科学技術に頼り過ぎるあまり、科学技術に支配され、それを操作する道具になってしまう状況も生みました。科学技術はすでにあらゆる所に入り込み、個人のプライバシーと安全を脅かしています。

科学技術は人間性を高めるためにあるべきです。クック氏は「科学技術が間違った方向に進んだ時、人間性が道を照らす灯^{ともび}となる」と指摘しました。本誌今号は科学技術の人文価値をテーマに報道しています。

二〇〇三年、後方災害支援に当たる、実業家ボランティアによる慈済人道援助会が結成されました。彼らは物資を調達するだけでなく、工学研究院などの専門機関と協力して、災害現場で起こる様々な問題を、科学技術を通して解決するチームです。

キッチンカーがその一例です。一九九九年に台湾中部大地震が発生した時、慈済ボランティアは被災地で炊き出しを行うため、プロパンガスを現地に運び込みました。炊き出しの現場は愛に満ちていましたが、混乱した被災地ではガス管が入り乱れ、危険でした。この時の経験により、機動性の高い移動式厨房―キッチンカーが開発されました。その後、たゆみない改良を経て、昨年初めて台湾南部大地震が起こった際、安全で迅速な炊き出しを行うことができました。

二〇一一年、タイで発生した百年来の水害で国土の三分の二が冠水し、五カ月が過ぎても多くの地域は水に浸かったままでした。当時、慈済は大型浄水設備を開発済でしたが、使用上の制限が多く、タイでは効果が発揮できなかったため、慈済人道援助会は浄水設備の改良に力を注ぎました。

四年後、台風十三号によって台北市の水道水が汚染されました。水源地に

近い烏来の被災地で断水が発生した時、慈済は迅速に改良された浄水設備を立ち上げ、六千人分の浄水を供給しました。

そのほか、災害支援の必要性に応じて開発された科学技術は数多くあります。土砂が流れ出た被災地など、どんな地形であっても、物資の運搬ができる作業車や、座ることも横になることもできて、収納が簡単な折り畳み式ベッドの福慧ベッドなどがあります。回収したペットボトルで再製した毛布も、これまでに数十万枚が国内外の被災者の手に届けられています。

慈済人道援助会の組織運営はすでに軌道に乗っています。緊急災害支援ボランティアは定期的に操作方法の訓練を受け、支援活動がより迅速かつ効果的に行われるよう日頃から努めています。科学技術は人間性があるから、温かな輝きを放っているのです。こうして初めて科学技術は正しい価値を発揮することができるのです。

（慈済月刊六〇八期より）

慈悲×テクノロジーで

◎文・葉子豪 撮影・顔雲沼
訳・高嶋由紀子 校閲・薛美玉

台湾の災害支援を創造

キッチンカーや全地形対応災害支援車は被災地に入り、被災者やレスキュー隊と困難な時を共にします。浄水ユニットは川に流れる一枚の葉のように小さいけれど、汚水を浄化して甘露に変えます。福慧ベッドは被災した人々に十分な休息を与え、災害による心理的ショックを和らげます。

慈済は半世紀の慈善活動の経験とテクノロジーを結びつけ、衣食住行の各方面において、災害時の緊急のニーズに応え、様々な環境に対応できる災害支援設備を開発しています。台湾の災害支援を国際社会へ広げていくことに貢献しています。

二〇〇六年、エコ毛布の本格的な量産が始まりました。このエコ毛布は台湾慈済環境ボランティアが回収したペットボトルを再生したもので、元々は環境保護のための廃棄物の再利用が目的でしたが、その後、災害支援の際に配布するうちに、世界中の慈済人によって支援活動の現場に届くようになったのです。

この毛布は慈悲の心と現代のテクノロジーの完璧な融合と言えるでしょう。ペットボトルは回収し裁断してフレックにされた後、加熱溶解してペレットにされます。その後、糸をとる、紡ぐ、織るの工程を経て、毛布になります。しかし、

再生ペレットから作られた化学繊維は直径が人の髪の毛のたった二十分の一しかありません。そのため、一マイクロメー

Charitable Technology



●キッチンカー

トル、すなわち一万分の一センチ以上の異物が混じると、すぐに切れてしまうのです。

紡織業界で働く慈済人の黄華徳さんはこう言います。「どうしてうまくいかなかったのかと言うと、原料が純粋ではなかったんです。ですから『エコ菩薩』に頼んで、キャップとリングを除いてもらいました」。細かなところに潜んでいた「犯人」を見つけ出した後は、環境ボランティアが次々に材質の違うプラスチックでできたキャップとリングを取り除いていきました。数万人が慈悲心を發揮して、人と地球を守るために努力したおかげで、ついに実業界のボランティアが難関を突破し、ペットボトルを再利用した毛布の大量生産を実現したのです。

「これはエコ菩薩、実業家ボランティアの心がこもった愛の毛布です。だから人々が手にした時、毛布に織り込まれた愛を感じるのです」。実業家ボランティアの李鼎銘さんは熱く語りました。

人助けの道具を常に準備

ペットボトルで作ったエコ毛布は「慈悲テクノロジー」の代表作だと言えます。災害支援に必要なのは毛布だけではありません。

んでいる人を助けたいという慈悲心を胸に、機械を法器とし、工場や実験室を道場として、創造性とテクノロジーを發揮して、

ません。衣服や食糧、運搬用具、避難設備や救命設備などは、すべて平常時に準備しておく必要があります。災害発生後の劣悪な環境の中で救援を行うには、なおさら「手ぶら」では話になりません。

支援者と被支援者の切実なニーズを受け、たくさんの方の技術や専門知識を持つボランティアが「慈悲テクノロジー」の開発に取り組んでいます。これらの開発に携わる人は、数こそ多くないものの、工業技術研究院出身の博士、数十年間自動車修理に携わってきた職人、中小企業の「隠れた名匠」など、産・学・研の各界の専門家が揃っています。彼らは苦し

Charitable Technology



●全地形対応災害支援車

人助けの道具を生み出しているのです。

慈済ボランティアが既成の道具を使わずに、独自で開発する路線を採ったのは、一般の民生用製品の多くが、平穏な環境で生活しお金を払って利用する人々のために設計されたものだからです。それらは、水も電気もあり、修理業者もいる環境でスムーズに動くものであって、災害の現場で役立つとは限りません。

たとえば、市内の四車線道路に立っている大型の照明灯が、広範に明るく照らすことができるのは、市から大量の安定的な電気が供給されているからです。しかし、被災地や難民キャンプの多くは電力の供

給がありません。送電線の側から離れられない照明灯では、現地で今照明を必要としている人の役には立たないのです。

そこで、災害支援用のソーラーライトを開発するメーカーは、小型で性能の良い照明を設計しました。一時間当たりの電力消費量をたった九ワットに抑えた一方、特殊に設計されたレンズを組み合わせると、六×十二メートルの範囲まで照らすことができます。

最も劣悪な、物資の欠乏した環境にいる人たちのために最善のものを、というのが慈悲テクノロジーの設計コンセプトです。人助けを出発点とし、簡単、実用的、

修理要らずで、機動性が高く、自立して動くことを重視しています。プラスチック板とスチールパイプでできた仮設住宅も、クレーン車などの大型機械も必要なく、ボトルを締めるだけで建てられます。

二〇一三年の台風三十号（ハイエン台風）で被災したフィリピンでは、多くの被災世帯の目の前で「台湾の職人」が一度作って見せると、被災者はすぐに自分で自分の家を組み立てることができました。一人から十人に、十人から百人に、新しい「大愛村」にはあつという間に千戸もの家ができたのです。

また、静思精舎の法師が開発したインスタントのチャーハン、「香積飯」は、

熱湯を入れて二十分待てば温かいご飯が出来上がります。これは、二〇〇九年に台湾南部を襲った台風八号（モラコット台風）による水害の後、広く用いられる

Charitable Technology



●浄水ユニット

ようになったものです。泥沼のようになった屏東県林辺・佳冬地区で、地元住民の多くが被災後最初に口に入れた温かい食事は、慈済ボランティアが差し出した香積飯でした。中部や北部のボランティアが新幹線で南部へ支援に行く時に、お湯を入れた香積飯をバックパックに入れて持参すれば、食事の準備のために現地ボランティアの手を煩わせることはありません。

人としての尊厳を

二〇〇九年の台風八号（モラコット台

風）から、二〇一五年の台風十三号（ソウデロア台風）、台湾南部大地震、トランスアジア航空墜落事故に至るまで、その救助活動においては、いずれも慈悲テクノロジーが力を発揮しました。これらの道具が役に立つ時、災害はもう起きてしまつて取り返しがつきません。しかし、彼らボランティアたちが長時間黙々と働いたおかげで災害の傷が緩和され、復興が早まり、被災した人々も安心して、人としての尊厳を保つことができたのです。

これらの成果は、台湾社会が元々持っている善行を喜びとする伝統に根ざして

いるとともに、七、八〇年代以降の産業の勃興とテクノロジーの進歩が製造と開発のエネルギーをもたらしたのです。代々伝わる愛と善念に近代テクノロジー産業の実力が加わり、人と大地を守る強大なエネルギーが生まれたのです。これらの成果は簡単に得られたものではなく、未来にも伝え、永遠に発展させていかなければなりません。

創意に満ちた開発秘話を良き手本として、テクノロジーの専門家、技術の達人たちが慈悲で世を救うためにその専門能力を発揮してくださることを期待しています。テクノロジーの研究・開発を志す青年たちが、これら達人による創造的な

研究開発と、実践のストーリーを通じて、人道支援テクノロジーへの興味を持ち、自分の大願を成就し、衆生に利益をもたらす人になつてほしいと願っています。

Charitable Technology



●福慧ベッド

災害救助の前線に赴く深夜食堂

◎文・葉子豪 撮影・顔雲沼
訳・高嶋由紀子

ハイテクキッチンカー



- 特徴：3時間以内に900人分の料理が提供可能。ユニット全体を小型トラックに載せて運べる。
- 使用：トランスアジア航空墜落事故捜索現場、台南維冠ビル震災捜索現場

命を救う動くキッチン

「初代大愛キッチンカーは、一台のトラックでした」。蔡堅印さんは十八年前の台湾中部大地震から話を始めました。強い揺れが起きたのは深夜一時四十七分。台湾中の慈済ボランティアが、日の出を待たずに緊急支援を開始。香積チーム（慈済の食事作りチーム）は会館のキッチンの大鍋で料理を作り、工場の生産ライン方式で弁当箱につめて、小型トラックで大急ぎ避難所に届けました。

この慈済のセントラルキッチンから遠かったり、あるいは通行ができない被災地は、現地の慈済ボランティアが空地を

探してガスと野外用ガスコンロを運び込み、鍋や食器を並べ、炊き出しをしました。

證嚴法師は、台湾中部の被災地を訪れた時にガス管が入り乱れた炊き出し現場で、大人も子供も出たり入ったりしているのを見て、心配して言いました。「ここは狭くて、大きな鍋があつちで沸き、こつちで沸き、あつちこつちで野菜を切ったり、煮たり、ガス管も入り乱れていて、もし転んだりしたら大変なことになります」

台湾中部大地震の被災地だけでなく、台風の被災地でもこのような様子がよく見られました。法師は安全確保のため、二つの解決策をとりました。一つは慈済

せん。

の各集会所や環境保全ステーションにキッチンを設置することです。次に、調理器具やガス、コンロなどを収納したキッチンカーを作り、必要なところへ行くというものです。

「走るキッチン」を作るのは難しくはありません。二トン以下の小型トラックにステンレスの調理用具を据え付け、ガスや野外用ガスコンロなどの道具を載せればいいです。このような俗に「小発財（小金もうけ）」と呼ばれる小さなトラックは、路地でも走行しやすく、軽食を売る人たちがよくキッチンカーに改造して使っています。しかし、二トン足らずの小さな車体では、慈済の要求は満たせま

「二人分ずつ出すのにはよくても、私たちは大家族に、つまり一度に千人以上に食事を出さなければならぬのです」。蔡さんはキッチンカーの設計基準について話しました。

炊き出しの量を考えるなら、鍋も調理用具も大きくなければなりません、だからといって運搬に支障をきたすほど大きくてもいけません。しかし、それ以前に困った問題がありました。蔡さんは長年自動車修理業に携わってはきましたが、設計や改造をしたことはなく、機械の製図さえできなかったのです。

それでも、「師の志を己の志とす」「事

あれば、弟子その労に服す」の使命感に加え、車両の設計に対する好奇心から、蔡さんは勇気を出して挑戦することにしたのです。

台湾中部大地震の後に法師の指示を受けて開発を開始し、二〇〇一年に三・五トン級の「大愛キッチンカー」が検査に合格して、路上に出ました。蔡さんは二年の時間を費やして、ついに初めての試みを成し遂げたのです。

大愛キッチンカーの平穏な日々

大愛キッチンカーがお目見えしたのは、二〇〇一年八月、新竹で行われた「父母

恩重難報経」音楽手話劇の公演会場で、約三百人の出演者とスタッフに食事を提供しました。新店市に台北慈済医院が建設された時も、景観工事施工期間中、蔡さんはキッチンカーを運転して工事現場まで行き、一カ月にわたって食事を提供しました。

さらには、湖口の装甲兵基地にほど近い慈済竹東連絡所に常駐していた大愛キッチンカーは、新竹地区で軍、警察、消防、民間団体による防災・緊急救助の合同訓練が行われるたびに「召集」され、車列に加わって車両検閲を受けました。

「軍や民間のレスキュー隊も、この車をすごいと褒めてくれます」。蔡さんは

●初代キッチンカー
車体と調理設備を一体化させ、6・4トントラックに木の板を乗せて試作。だが、調理場が高すぎて落下の危険性があったため、荷台の低いトラックに変えた。

誇らしげに言いました。

災害支援を「実戦」に例えるなら、大愛キッチンカーは十数年の間「平穏な日々」を送ってきました。苦勞して開発したキッチンカーですが、その出番がないことは設計者の彼にとっては喜びでした。

「初代は機能を運用する出番はめったにないうえ、ほかにできることも思いつきませんでした」。二〇一〇年に移動式浄水設備など災害支援設備が次々に改良されてゆき、



蔡さんはこれにヒントを得て新しい設計のアイデアが浮かびました。「小さいから役に立てないのではないか？ ならば大きくして、発電機や冷凍庫、冷蔵庫からテントまで、全部つけよう、と思いました」と話します。

調理器具と車体を分離して 自由度アップ

大愛キッチンカーをよく見直した蔡さんと仲間たちは、車体と調理を合体させた初期の設計は、ベストではないことに気がつきました。「私たちのキッチンカーは、商売のように毎日使うものではない

いし、車とキッチンが一体化していると、ほかに使い途ありません。毎年一、二度しか出番がないのではもったいない……」というのが、ボランティアの柳宗言さんの意見でした。

そこで、蔡さんはキッチンと車体を分離することにして、設計図を描き直しました。初代の大愛キッチンカーは一台しかありませんでしたが、慈済環境ボランティアが所有する三・五トントラックは、九百台以上もありました。これらの車は、平常時は各地域で資源回収車として使われ、ひとたび災害が起こると緊急輸送部隊に变身します。

二〇〇九年八月、台風八号（モーラコ

ット台風）が台湾南部を襲い、大きな被害をもたらしました。慈済は新幹線で人を、トラックで機材を運び、人と物を迅速に台湾南部の佳冬や林辺などの被災地に送ることができました。キッチンを小型トラックに載せられるコンテナ型にすれば、多くの車がキッチンカーとして使えます。

小型トラックに乗せて走るなら、キッチンユニットのサイズは荷台よりも小さくしなければなりません。ユニットを載せることで重心が高くなりすぎると危険なので、高さにも気をつけなければなりません。これまでの経験から、蔡さんは

●最新のキッチンカーでは車体とキッチン部分を分離させた。各ユニットを全て収納すると白いコンテナになり、3・5トン以上のトラックであれば載せることができる。



蔡堅印さんは14歳で自動車修理工の見習いとなって以来、50年にわたりこの仕事に従事してきました。機械の専門教育を受けたわけでもなく、機械の設計図の描き方も知らない彼は、絵を描くのと同じようにキッチンカーの設計図のラフを描き、心の中にスケッチした夢をだんだんと現実のものにしていったのです。

手描きから実物へ

アマチュア発明家、蔡堅印さんの夢のキッチン

1. 必要な食事の量を見積もり、最短で最大の供給量を目指す。3時間以内に900人に食事を提供する。
2. 必要量の見積もりに応じて必要な調理器具の種類と数量を推算する。
3. キッチンカーのスペースを計画する。積載する調理器具ユニット、3.5トントラックの積載能力および荷台の寸法に応じて、調理器具の配置を考える。
4. 調理器具の製造に協力してくれるメーカーを探す。
5. 側板、電動油圧スタンド、アームなどの機械装置を設置する。

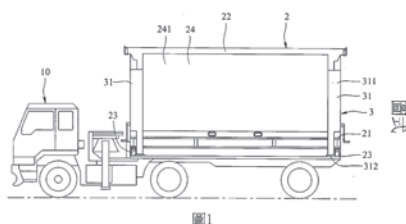
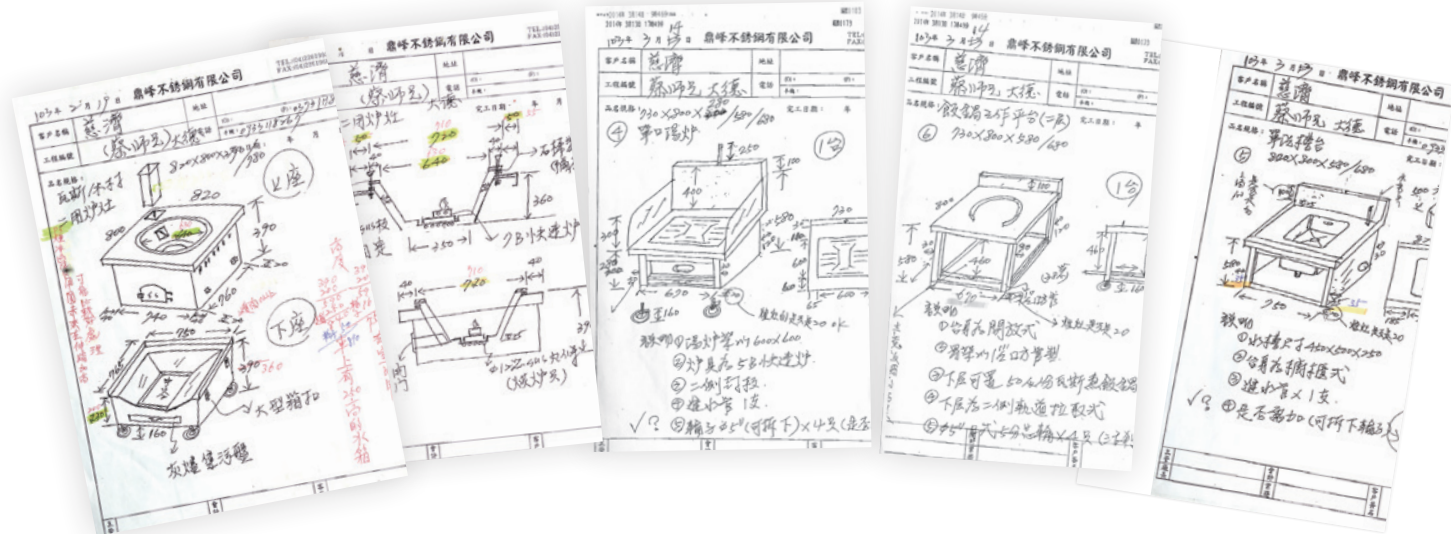


図1



二代目キッチンカーのサイズをいっそう綿密に設計しました。

ユニットを全て収納すると、太陽光パネルがついた大きな白いコンテナになります。ボランティアの張敏忠さんは六つ

のユニットで一つのキッチンユニットができあがるように設計しました。蒸し器、スープ鍋、中華鍋などの調理器具の各ユニットを、必要に応じて組み合わせ使います。

蔡さんは香積ボランティアの話を参考に、台湾式キッチンカーのユニットを考案しました。五十人分の炊飯釜が二つ、かまどが二つ、スープ鍋が一つ、蒸し器が一つ。変わっているのは昔ながらの大かまどで、ガスのない時でも薪を燃やして調理できます。電力は太陽光パネルとバッテリーでまかなうため、外からの電源は必要なく、電気のない場所でも

二十四時間作業ができます。

二代目のキッチンカーは、体積は若干小さいながらも機能はそのままで、同じく三時間で千人に一汁四菜の食事を提供することができます。災害状況がより深刻な場合は、鍋をすべて使ってお湯を沸かし、即席の「香積飯（慈済が開発したインスタントチャーハン）」をお湯で戻せば、より多くの人に食事が提供できます。

エネルギー補給ステーションが各地にオープン

二代目キッチンカーは二〇一三年に完

成し、二〇一五年二月に台北の基隆河で発生したトランスアジア航空墜落事故の救援活動で、初めて災害支援に使用されました。台北の慈済人は事故現場近くの集会所で温かい食事と飲み物を用意し、

小型トラックで救助活動の前線に運びました。しかし、寒波が訪れたその日、基隆河の墜落現場は吹きさらしで、熱い食事も飲み物もあつという間に冷めてしまいました。

温かい食事を安定して供給する必要があったため、新竹区のボランティアが台北までキッチンカーで支援に向かいました。「キッチンカーがあれば、材料を持

つてきて現場で調理し、温かいままレスキュー隊員や、駆けつけた被災者の家族に提供できます」。板橋から支援にきたボランティアの詹龍禎さんが力強く言いました。

一年後、キッチンカーは、旧正月の直前に強い地震に見舞われ、倒壊した台南市永康区の維冠金龍ビルの救援のために再び出動しました。被災者やレスキュー隊員、それに取材に当たる報道関係者にとって不可欠なエネルギー補給所となりました。

被災者の家では正月どころではなく、レスキュー隊員が倒れたマンションの中



● 2016年、台南大地震の捜索現場付近では、慈済ボランティアがキッチンカーで「深夜食堂」を開き、被災者やレスキュー隊員に温かい食事を振る舞った。(撮影\柳宗言)

から一刻も早く家族を救出してくれるように、祈りながら待っていました。この間、慈済人は家族に付き添ったり、犠牲者のために助念（死者の冥福を祈って八時間読経する台湾の風習）を行ったり、温かい食事を提供するなどの後方支援を行いました。台南の静思堂が準備した弁当を十五分から二十分かけて運び、現場で温かいスープや生姜スープなどを作りました。

「何か食べるものではありませんか？」と、お腹を空かせた二人の新聞記者が慈済のテントを訪れました。夜八時過ぎのこと、静思堂のキッチンはずでに弁当

の配布を終えていました。柳宗言さんは、台南の特産である関廟麵の袋を開け、キッチンカーの鍋を使って麵を茹でました。白い麵が煮立ったお湯の中を泳ぎ回り、蒸気とともに淡い麵の香りが漂いました。

数分後、麵が茹であがり、ボランティアが淹れた熱いコーヒーと一緒に手渡しました。「本当にすみません!」。熱々の麵とコーヒーを手渡された二人の記者は、何度もお礼を言いました。

続けて休む間もなく、瓦礫を運んでいたトラック運転手、休憩のレスキュー隊員が慈済のテントを訪ねてきて、麵やコ

ーヒーを頼みました。一度に多くの人が集まってきたので、家に帰って休む予定だったボランティアも残って手伝いました。

暗い夜の中の温かな照明と鼻をくすぐる食べ物匂い。まるで「深夜食堂」という日本のドラマに出てくる情景にそっくりだった、と柳さんは回想します。帰宅の遅い人や、夜眠れない人に食事を出す食堂を描いたドラマです。食堂の主人は、お客の胃を満たすだけでなく、彼らの心の声に耳を傾け、温かな食べ物と言葉で心の傷を癒やしていきます。あのと慈済人がしていたことも、同じではな

かったでしょうか。

「レスキュー隊員は二十四時間休みなく救助に当たっており、深夜でも食事が必要です。そこで、私たちのキッチンも時間を延長することにしました」と、柳さんは言いました。気温の下がる夜中には誰しも温かい麺をほしがるので、一度に二、三十人前の麺を茹でます。その時使用していたキッチンカーは、海外の慈済人のためにカスタマイズしたバージョ^ンで、六つの大鍋が設置されていました。「五つの鍋で麺を茹で、残りの一つでお湯を沸かしてエコ食器を煮沸消毒しました」

二月十日に現場に到着し、十三日の捜索活動終了によって店じまいするまで、柳さんはこの「深夜食堂」でどれだけの麺を茹でたでしょうか。一晩に二百七十碗以上の麺を茹でただけは覚えていきます。ボランティアが淹れたコーヒ^ーは合計七千杯以上に上がりました。

もちろん提供した食事の数は重要ではありません。変わることなく、被災者や支援者に誠実に寄り添い、痛みを癒やす真心こそ、最も人を感動させるのです。

●
「これはジンバブエ用に特別にカスタマイズされたもので、現地の朱金財師^ズ

兄^{シヨ}（師兄は慈済の男性ボランティアの呼称）が貧しい人や子供たちに食事を提供しています。彼らはおかずは一、二菜程度でよく、ご飯をたくさん食べますので、中華鍋は一つだけ。蒸し器の代わりに炊飯釜を六つ置いたのです。この六つの釜のご飯ができたなら、すぐに続けて炊きます」

柳宗言さんは「防災・救助科学キャンプ」の学生たちに、キッチンカーの開発過程とその機能について説明しました。最初の大愛キッチンカーから、ジンバブエ、マレーシア、フィリピンなど各国のボランティアのニーズに応じてカスタマ

イズされた、ユニットキッチンカーに至るまで、設計のコンセプトはどれも、「走りながら隊列を整える」ということでした。

「この仕事にビジネスの市場はありません。慈済ボランティアがやるしかありません」。蔡堅印さんは、今までの歩みを振り返りながら、昔も今も相変わらず製図が苦手だ、と話します。しかし、若い頃から弟子入りし、これといった学歴のない蔡さんは「為せば成る」の信念で志願した使命に力を注ぎ、ついに自己の限界点を超え、プロのエンジニアも驚くような作品を作り上げたのです。



●マレーシア
2015年の大水害後、慈済人は災害時の食事支援のためにキッチンカーを準備することにした。設備は台湾版のものと同じだが、側板に小さな仕切りを加え、仕切りを引き出して面積を増やせるようにした。



●台湾
キッチンカーのカスタマイズ ◎ (写真提供 張敏忠)
50人分の炊飯釜2つ、大かまど2つ、スー鍋1つ、蒸し器1つ。そのうち、昔ながらの大かまどは、ガスのない場所でも薪を燃やして調理ができる。



●フィリピン
スラムで火災が頻発しているため、いつでも温かい食事を提供できるよう、ガス式炊飯釜4つ、ガス・薪両用かまど2つ、流し台、調理器具の収納棚各1つを備え付けている。



●ジンバブエ
ボランテアによる長期の貧困救済活動の中で、主食のご飯の需要の多いことがわかったため、ガス炊飯釜を6つ据え付けた。ほかに、流し台、ガス・薪両用の大かまど、大型の中華鍋、調理器具保管棚各1つがある。



◎文・張敏忠／訳・閻麗妮

私利私欲のない無上の宝

慈悲テクノロジーの研究開発はなかなか利益に繋がらない。しかも災害支援のニーズに応じて随時修正する必要がある。あきらめずに成果が上がるまで続けるかどうか、最後はその人の思いの強さにかかっている。

私は新竹区の慈済ボランティアで、かつて工業技術研究院に務めていた。幸いに仕事と志業が結びつき、災害支援に使う機器の研究開発と製造において、わずかながら貢献することができた。

ここ四、五年の間、工業技術研究院の慈済への支援に携わり、キッチンカー、

浄水設備、井戸掘削装置などを開発した。台湾は「慈悲テクノロジー」の開発において優勢な立場にあるが、そこに至るまでには、相当の覚悟をもつて数々の困難を乗り越えてきた。

技術面では、台湾はすでに災害支援用の機具や設備の製造に欠かせない技術や

部品を持っている。したがって、工業技術研究院は救済活動だけのために、今までにない新しい技術を開発することはなく、すでに開発された技術を災害支援用に応用し、ニーズに応じて改良している。

工業技術研究院にしても業界にしても、すでに開発された主要技術を整理し直して、製品を作っている。たとえば、浄水設備やキッチンカーなどである。ところが、技術的には可能だと言っても、それらを応用して最適の製品を作ることには、実際はそれほど簡単なことではない。

一般的な研究機関や製造メーカーが開発した製品は、売り上げや利益を念頭に

置いて作られる。ある程度の受注量と売り上げを見込んで、利益に繋がらなければ、手を出さない。しかし、慈済が必要とする災害支援用の機具は数が少なく、研究開発者や製造メーカーにとって利益が少ない。それでも引き受けてくれるのは、なかなか出来ないことである。

キッチンカーを例に取れば、初め台湾で必要だったのは四台だけだった。そういう特殊な規格で、しかも数が少ないオーダーを普通メーカーは引き受けない。そのため、設計者の蔡堅印師兄はどこへ行っても断われ、最後には自分で部品を買って作るしかなかった。

慈濟の仮設住宅は五十回以上も試行錯誤した末、ようやくドライバーとねじだけで組み立てることができる実用的なタイプがいくつか出来あがった。「慈悲テクノロジー」は開発段階で常に難問が出てくるため、途中であきらめるしかないこともあった。だから、人々の目に触れ、使えるようになるまでには、大変な苦労があったのだ。

利益にならない上、救援活動に合わせ状況に応じて改良する必要がある。最後まで成果が出るまであきらめずに続けるには、やはり信念の力が必要ではないかと思う。もし、研究開発の担当者が證嚴

法師の悲願と慈悲の心を根本から理解し、しかも仏の心を我が心とし、師匠の志を我が志とするなら、困難に出会った時、成し遂げる力が湧いてくるだろうと思う。

「静思語」には、「願が大きければその分力も大きい」という言葉がある。もともとテクノロジーの研究開発というのは容易な仕事ではない。慈悲テクノロジー製品は劣悪な環境の下で、操作しやすく、設置や運搬が簡単であることが要求されるが、設計の工程がとても複雑なため、普通の製品開発よりもっと苦労するのは明白だった。努力を積み重ねて出来上がったものだからこそ、もっと大事に扱い、

上手に活用すべきである。

人文志業センターはこれらの「慈悲テクノロジー」の研究開発を記録することで、困難な道を歩んできた名も無き英雄たちが人々に認められ、尊敬されることを期待している。この本に書かれた製品や開発者の物語は、全て台湾の愛と善と科学技術の実力のストーリーである。私も、「慈悲テクノロジー」の開発に携わった者の一人として光栄に思っている。そして産業界や政府、研究者の先輩達が、もっと理解してこの志業に参画し、共に「慈悲テクノロジー」を発展させていくことを願っている。

(《慈悲テクノロジーMIT》の推薦文より)

慈悲テクノロジーMIT

作者：葉子豪

出版日：2017年7月

出版のご支援とご購入を

お待ちしております。

慈濟道侶叢書へのお問い合わせ：

<http://web.tzuchiculture.org.tw/>

886-2-28989000 内線 2145



●慈悲テクノロジーの製品は劣悪な環境の下で、簡易な操作と輸送を求めて、一般的なテクノロジーの製品よりも開発に心血を注いでいる。ようやく手に入れた成果は大切に活用されなければならない。

大愛ラジオ局より祝福を

◎文・慈韻 訳・黒川章子

今年七月、「慈濟月刊」は創刊五十周年を迎えた。これまでのひたむきな歩みをずっと見つめて来た「大切な仲間」として、我々大愛ラジオ局から「慈濟月刊」編集部各位へ、敬意をこめて盛大な拍手を送りたい。

「人心を浄化し、睦まじい社会を目指し、世界に災難が起こらないことを祈る」。これが慈濟メディア共同体の使命である。これからも證嚴法師に安心してもらえるよう、共に努力しよう。「慈濟月刊」の五十歳の誕生日に際し、心から祝福を送りたい！

私が大愛ラジオ局で勤務し始めたのは一九八九年のことである。それからずっと「慈濟月刊」の忠実な読者になり、毎月必ず隅から隅まで読んでいる。大愛テレビと「慈濟月刊」の関係も良く、お互

いに連絡して助け合い、ニュースがあるとすぐに「今月の担当はどなたですか？」と問い合わせる。文字と音声の二つが一つになってこそ報道は成り立つのだ。このように息の合った関係が今日まで続い

ている。

「慈濟月刊」との出会い、静思精舎で徳宣師父の講義を聞いた時、読むように勧められたのが始まりである。それからというものの、「あなたは本当に熱心に読むんですね。赤ペンで線まで引いているなんて。読んだ後に大事などころはもう一度読み直して、ノートもとっているんですね」。よくこのように言われたものだ。

私流「慈濟月刊」の読み方

私はまず「社説」から読み始める。「社説」を読むと、今月号の要旨や、志業活

動の内容が分かるからだ。

次に目次を見て、今月の特別報道は何が見る。それから「證嚴法師行脚足跡」。法師の一問一答が掲載されているので、これも重要だ。お側でお話を聞くことができなくても、その問答を読むと、法師の智慧に触れ、足跡を辿ることができる。

その次は「無尽蔵（お諭し）」の欄だ。法師のお諭しの要点が把握できる。今月号の復習にあたる作業だ。大愛ラジオでは毎日法師のお諭しを放送しており、私も聞いているが、一カ月の内容をわずかに四頁にまとめるのはとても大変な作業だろうと、編集者の配慮と努力に頭が下がる。

目次を見ると特集のテーマやコラムの



● 2013年慈済ラジオ局秋期集会の様子。放送部役員・慈韻（前列中央）と同僚及び報道ボランティアの記念写真。記念のトロフィーと盾を手に。（撮影\林群傑）

内容が分かる。援助活動オンライン、人物紹介、朝会の記事……。台湾のことも世界のことも掲載されており、ラジオ放送に使えるような記事を見つけることもある。

私にとって「慈済月刊」は大切な資料だ。仕事の合間に、いや、たとえ時間を作っても、読まないわけにはいかない。自分だけでなく、同僚との研修に際しても「證嚴法師行脚足跡」を必ず読み、新人社員が来れば、話題にしている。ここではただの仕事としてではなく、志業を行うという使命感を持って働いてほしいからだ。

同時に放送も聞く

大愛放送局の報道には三十年来の大事な聞き手がいる。受刑者である。刑務所からの申請があれば「慈済月刊」も送付する。これまで送り返されたことは一度もない。大愛の報道を聞き、加えて「慈済月刊」を読むと、その相乗効果によって、彼らの心にまるで愛の種が蒔かれたかのように、前向きな力が備わってくるのだという。そして、いつしか人助けまでできるようになるそうだ。

マスメディアに携わる同業者として「慈済月刊」は非常に参考になる。毎月

届いたら肌身離さず持ち歩き、自宅のマンションの公共スペースや、かかりつけの病院など、そのほか机があればどこでも「慈済月刊」を取り出して見ることにしている。これがあれば、スマートフォンでインターネット放送を聞いたり、QRコードをスキャンして誰かのLINEに加入するのと同じように、いつでもどこでも慈済を説明し、理解してもらい、より多くの縁を結ぶことができるのだ。

では私自身は「慈済月刊」から何を学んでいるだろうか？ たとえば「法師行脚足跡」の内容を理解した後、同僚と分かち合い、報道の前置きに使ったり、アナウン

サーに紹介してもらったりしている。

毎月のテーマが重要だと気がついたからだ。また、「静思小語」は短いからこそ訴える力を感じる。私たちは声に出して読むことにしている。見出しにも工夫が見られると感じる。

このような文章があった。「若い頃法師に付き添っていた慈済の重要な方々は、すでに七、八十歳ですが、変わらずに精進を続けています。法師は、その方々が感恩の心で以て善行を行う姿勢に深く感謝し、苦勞をねぎらっておられます。年輩の皆さんは苦しい時も、人々から理解されない時も、不平をこぼさず、喜び

の気持ちを心に抱いて、精進してきました。願を發したら、相手の反応にはこだわらず、心の曇りから道をそれることはあつてはならないという信念を持っています」

この記事の題名は「願を發し、恨みを持たない」だった。「静思小語」には「心にこだわりを抱いてはならない。広く誓願することが大切」とあった。私が学びたいと思っていたのはこの精神だ。こんなに分かりやすく書いてあったとは！迷わずここに赤線を引いた。

もう一つ大きな見出しがつけられていた。「心願を發し、これを行う」である。「静

思小語」にも、「善行を習慣にし、心にはいつも愛に満ちた善の思いを抱きましよう」とあるように、善行を生活の中に根づかせ、自分で決めたことはやり遂げられるのだという觀念を伝えていく。これも大愛ラジオ局の理念の一つである。

人々のために美しき善を書き記す

現在のマスメディアは正しい放送表現から乖離した傾向にある。テレビ、インターネット、雑誌、ラジオにかかわらず、番組の名称や謳い文句が、全て話し言葉風になってきたのだ。一方、「慈済月刊」

二〇一七年六月号（六〇七号）を例にとると、「老いて一人暮らしでも孤独ではない」という特集に、「Alone but not lonely」という英文が付け加えてあった。「老化は問題ではない」という話題だとよく分かる。

その月には、九十三歳の呉大友さんへのインタビュー記事が掲載されていた。カレンダーに予定がたくさん書き込んであり、呉さんが熱心に奉仕を行い、それを喜びにしていることがよく分かる。人に迷惑をかけず、頼らず、こだわらず、欲を出さず、夜にはいつも横になると五分で寝つくそう。八年前に慈誠隊員（慈

済の男性ボランティアチーム」となった彼は、「私は毎日幸せですよ」と語っている。まさに「上流老人」の手下といえる。

その月の特集では、年輩者の暮らし方を取上げた四本の記事が掲載されていた。この年配者たちのユニークな老後を見ていると、法師のよく言われるお言葉、「社会に老人がいることは問題ではありません」に納得できる。

毎号の「慈済月刊」の特集には頭が下がる。計画された取材に基づき、慈済の活動を詳しく記録している。二〇一五年十月号（五八七号）は「縁を結んだ道をふり返って 大愛ラジオ三十周年」だっ

たが、私たち大愛ラジオ局の歩みが資料として保存されていたのだ。長年大愛ラジオ局に勤めてきた者たちにとって、これ以上の励ましはなかった。この場を借りて、深く感謝を申し上げたい。

二〇一六年九月号（五九八号）の特集、「初心を忘れず 花蓮慈済病院三十周年」には、五十五頁が割かれてあった。祝賀会の様子から開業当時をふり返り、医者不足の困難な時に、使命を以て赴任してきてくださった若い医師たちの回想録もあった。今では白髪をたたえた彼らは、今も慈済病院で活躍されている。その姿にはとても励まされる。

一つ一つの記事に感動し、心を動かさ

れた。私も心から慈済大学医学部の学生（九十七期生）に、偉大な先輩方を見習って将来立派な医者になってほしいと祝福を送った。慈済の子供たちが自ら病院を支えていくことを願っている。

二〇一七年七月、「慈済月刊」は五十周年を迎えた。この半世紀、困難な時期でも立ち止まることなく、成長してきた。私たち大愛ラジオ局は、その仲間として、編集者一人一人に温かい拍手を送りたい。彼らがどれほどこの仕事を大切にして、勤めてきたのかを知る一番の理解者

でありたいと思う。

世の中には美しい善の物語があふれている。「人心を浄化し、睦まじい社会を目指し、世界に災難の起こらないことを祈る」。これを慈済メディア共通の使命として、一緒に努力を続け、法師を安心させよう。最後に、あらためて、五十歳の誕生日を迎えた「慈済月刊」に祝福を！

●大愛インターネット放送の視聴はこちらから

http://radio.newdaai.tv/aod/index_in.php

●FBログインページはこちらから

<https://zh-tw.facebook.com/daairadio.tw/>

●LINE IDは「@oun1067y」、

またはQRコードで検索し、友達の設定をどうぞ



医師の対話

二人の医師は熱心に話をしていた
診察室の中での診察だけではなく
休日も基隆八斗の弱者家庭を訪問して
病気に苦しむ人の治療をサポートしている

北区人医会のメンバーは毎月、新北市の瑞芳で施療を行っている。瑞芳中学校の体育館で、歯科、耳鼻科、整形外科、東洋医学、眼科、内科などの無料診察を行う以外に、八斗、暖暖、七斗、仁愛、瑞芳に出向き、往診も行っている。

台北慈濟病院のスタッフが長期に亘って行ってきた施療活動に、この度、趙有誠院長と張耀仁副院長並びに小児科の蔡立平医師とリハビリの

邱佳儀医師、そしてボランティアが参加した。珍しい病気を患った患者は、この機会に治療の希望を見い出すことができ、また長期に亘って介護してきた家族は、ほつと肩の荷を下ろすことができた。

二〇一〇年に看護科二年生だった劉さんが実習生になった時、体に異常が現れ始め、注意力や集中力に欠けるようになった。母親は劉さんを病院へ連れて行き、一日に複数の科で八人の医師の診察を受けさせたが、確実な診断は下されなかった。最後の検査の結果、ウィルソン病という遺伝と関係がある珍しい病気だと分かった。銅に対して代謝異常を生じ、過



●訪問ケアで、提供できる最良の医療を話し合う台北慈濟病院の張耀仁副院長（右）と遺伝子医学専門家の蔡立平医師（左）。（撮影・鄭碧玲）

多の銅が臓器に蓄積され、組織破壊が進む病気だった。

母親は「こんな良い子に無常が訪れるなど誰が予想できるでしょうか。健康で勉強熱心で、高校生の時、将来人に尽くしたいと看護師への道を選んだのに」と言った。狭い部屋の中で、母親が娘の発病からこれまでの経過を説明するのを、往診に訪れた医師たちは静かに耳を傾けた。

母親はウィルソン病を患った娘を七年間一言も愚痴をこぼすことなく、一心に介護してきたが、ほかの三人の子供も病気に罹るのではと心配していた。趙院長は検査のため子供たちの血液を採血して持ち帰ることにした。遺伝学専門の蔡立平医師に遺伝子検査を依頼し、さらに後続治療について討論した。

邱佳儀リハビリ医師は劉さんの基本検査を行った後、手元にある物でリハビリを行うようにアドバイスし、同時に変形している手足の状態を記録して、適切な補助器具を提供することにした。

劉さんの家を後にした後、一行は、二度も中風に冒されて左半身が麻痺し、歩行が困難な周さんを訪ねた。邱佳儀医師は周さんの足の寸法を測り、足に合う歩行器を作ることにした。足が変形し委縮するのを防ぎ、元の状態に戻って自立した生活ができるように、リハビリ計画を立てた。

周さんの奥さんは朝、市場で野菜を売っている。野菜を秤の上に載せて計り、一束一束結んで売って得られる収入はほんの僅かしかない。それにアパートの三階に住んでいるので、病院へ行くのも不便だった。

周さんの往診を終えた後も、趙院長とスタッフは周さん一家の困窮をどうやって解決すればよいか考えていた。政府は在宅長期ケアの補助制度を設けており、家庭の状況によって提供している。補助を申請するには専門医の判断が必要である。趙院長は、「診断書を書いて、政府の補助制度を申請し、定期的によりハビリのサポートを受けられるようにしよう」と言った。

趙院長は日頃から、弱者家庭の患者の心に寄り添い、ケアをしている慈済の地域ボランティアに感謝していた。ボランティアがケアしている



●瑞芳は雨が多い。苔の生えた狭い階段は滑って歩きにくい。往診団の一行はケア家庭の自宅まで、注意しながら上って行く。

（撮影・陳光隆）

家庭には、専門医のアドバイスが必要な病状が複雑な患者もいる。ボランティアは資料を慈済病院に送り、それを受けて、医療スタッフが準備をし往診に行くのである。「以前は専門医が看護師やボランティアと一緒に往診して、往診や掃除など居住環境の整理を手伝っていましたが、今回は各科の医師とボランティアが協力して、患者に最も行き届いたケアをすることができました」

「苦しんでいる人が出てこれないなら、私たちが彼らのもとへ出向きましょう」と趙院長は言う。台北慈済病院は新北一帯の患者の後ろ盾となり、人々の力を借りて、苦難の人々に最良のケアを行っている。

（慈済月刊六〇六期より）

貧と病

太平洋とカリブ海の間には浮かぶホンジュラスは

中南米の最貧国と言われている

病院では薬品と設備が欠乏し

国民は貧と病の二重苦に苦しむ

人々は医療救助に一縷の望みを抱いている

ホンジュラスの首都テグシガルパ郊外にあるスヤパー職業学校は、週末になると夜も明けきらぬうちから多くの人でにぎやかになる。ホンジュラスの主食であるカステイリヤ・デ・ピラ（小麦粉を薄く焼いたもの）の屋台や、呼び売りが出る。慈済の施療の開始を待つ患者たちは、照りつける太陽や、街角から漂ってくる香りにも我慢していた。ここは紛れもない貧困国家である。

六十九名の医師とボランティアによる施療活動の会場では、診察を待つ列が坂の上まで続いていた。粗末な服を着た人たちは、ハンカチや団扇で太陽を遮り、一步一步半開きの門へ向かって移動している。ボランティアが名簿を手に患者を確認しているその両側には、銃を持ったいかめしい兵士が立っている。この光景から、住民がどれほど診察を待ち望んでいるか想像できる。

天災と人禍 水も薬品も欠乏

ホンジュラスは貿易赤字と外国債券などの問題を抱え、重債務貧困国に認定されている。政府は一連の経済成長措置を取っているが、未だに貧困から抜け出すことができない。

ホンジュラスの復興を阻害しているもう一つの原因は、天災と人禍による災難が絶えないことにある。一九九八年にハリケーンミッチによつ



● 慈済はスヤバー職業
学校で施療活動を実施
した。現地ボランティア
アが患者の手を引いて
診察室へ案内する。(攝
影・葛濟捨)

て重大な被害を被った後、風災、水災が代わる代わるホンジュラスを襲い、その大地は傷を癒す暇もなかった。

ホンジュラスは一八二一年にスペインから独立して以来現在に至るまで、幾多の政変を経てきた。財政困難の国庫の大部分が軍事面に費やされ、民生建設を顧みてこなかった。二十一世紀を迎えた今日に至っても、多くの町や村には水道水がなく、人々は容器で水を買っている。衛生環境はさらにひどく、デング熱など、蚊などの虫が媒介する伝染病が毎年発生している。二〇一六年にはジカウイルスが蔓延した。

国の医療保険制度があるにはあるが、多くの国民は保険費が払えない。政府は給料の中から自動的に差し引いているが、職についていない者には差し引く所がない。

一般的に大都市に住んでいる者は公立病院で診察を受け

られ、保険のある者または職のない者は払う必要がなく、保険のない者は三十五ドルの診察費を収めなければならない。しかしホンジュラスは薬品が欠乏しているため、病人は薬をもらえず、診察を受けても病を治すことができない。

田舎に住んでいる人たちは保健所で診察を受けられるが、同じく薬をもらえず、処方箋を薬局に出して買う。高価な薬を買えない人たちは、白内障をほったらかして失明したり、癌患者は家で死神を待つばかりだ。こうした状況において、ホンジュラスの社会保険庁が百億ドルもの薬品汚職事件に手を染めていたことが発覚し、世界を震撼させた。

医療サービスと愛の寄り添い

一九九八年、ハリケーンミッチが去った後、慈済はホンジュラスを国際援助活動の対象とした。今年の五月、ホンジュラス慈済連絡所責任者



●ホンジュラスでは病気イコール悪夢である。国民は医者に診てもらっても薬は得られない。医療インフラが欠乏しているため、6000人以上いる医師が就業することは難しい。並んで慈済の施療を待つ人々の顔は憂いを帯びている。

の張鴻才さんは、米国慈済医療基金会の葛済捨執行長と張秉東医師と共に、医療援助の方法を検討した。

十年以上の医師資格を持つ葛済捨医師は数度にわたってボランテアとホンジュラスへ行き、大愛支援家の建設や施療、物資の配付などを行っていた。貧困と病に苦しむホンジュラスの問題に詳しく、今回現地ボランテアと合同で活動を行った後、活動について

の評価を行った。

五月二十八日の施療では、現地ボランテアのアイデアで、診察時間待つ間、蚊や虫が媒介する伝染病の防ぎ方について説明した。医学部の学生ボランテアがポスターを掲げて、あちこちを回って衛生教育を宣伝していた。また、栄養学が専門の学生たちは、健康的な食事のとり方について説明し、糖尿病や過敏症の患者には部屋に入ってもらって指導していた。

また、安心して診察を受けられるように、ボランテアは道化師に扮して連れの子供たちを喜ばせた。絵を描かせたり、風船を吹いたり、ゲームをしたりして、子供たちを世話した。

平均して一人の患者につき二人のボランテアが世話をしていた。貧しい上にシャワーの水にも事欠き、異臭のする患者を、ボランテアは少しも気にせず、皆の顔は幸せそうだった。

学校の中のトイレには手を洗う水道がなく、服で手についた水を拭く

のが習慣になっている。多くの地域では水がなく、皮膚病の患者が多い。あるお年寄りはいどい喘息で、二人の娘は皮膚病にかかっていた。葛済捨医師は、雨季が過ぎたら家の大掃除をして、埃を払って清潔にすること、陽が出ている時は布団を干して、冬に備えること、などと注意をしていた。

当日は百十一人のスタッフとボランティアが、延べ九百四十四人の患者の治療をサポートした。その中で、さらに治療を支援しなければならぬケースが五人あった。その中の一人は十七歳の男子で、生まれた時から膝より下が不自由で、二年ごとに足の補助器具を取り換えなければならなかった。最近器具が合わなくなり、新しく換えるには四百ドルが必要だった。慈済は補助金を出して、支援することにした。

施療は午前八時に開始し午後三時に終わる予定だったが、患者があまりにも多く、夕方の六時半にやっと終了した。

緊急医療をリタイアしたゴール医師は、今までに見聞きたことを



●米国慈済人医会のメンバーで歯科医の陳尙満医師（右から2人目）とボランティアは、子供たちに衛生教育を行った。この日の患者は128人だった。

ノートいっぱいに記録した。「今回の施療は組織力が最も高く効率的でした。どのボランティアも自分の任務をよく理解し、複雑な環境の中で、混乱が起きないよう患者を案内し、愛を以て患者に寄り添っていました。患者に医療サービスを提供しただけでなく、真心からの愛と関心をも提供していました」と言った。

台湾からやってきて
ホンジュラスを護っている張さん

慈済が二〇一一年にホンジュラスでボランティア訓練を開始してからこれまでに、



●ホンジュラスと米国の慈済ボランティアが手を携えてホンジュラスで活動してきた。2011年以来実施している7回目の施療を行った時の記念写真。

ホンジュラスは世界で最も犯罪の多い国である。「治安のとくに悪い地域の住民は、出かける時は生きて帰れるだろうかと覚悟をきめなくてはならないと言われています」。このことを張さんは非常に残念に思っていた。

文化も人種も違う国で、張さんはクーラーのない家に住み、故郷の野菜や果物を植えている。張鴻才さんは、クーラーや贅沢な食事が待つ華やかな世界に戻ろうと考えたことはない。ホンジュラスに対する使命だけがある。小柄な体で袖をまくり、ズボンの裾をたくしあげて畑を耕し暮らしている。その一方で、物資配付や大愛村の支援建設、そしてボランティアの訓練に至るまで、慈済の活動に全力を注いでいる。

（慈済月刊六〇七期より）

慈済委員の認証を受けた人は四人、現在委員の訓練を受けている人は四十五人、見習委員は四百十九人いて、ほとんどが現地の人である。

慈済連絡署責任者の張鴻才さんは台湾人で、一九八七年に台湾電力技術団の一員としてホンジュラスに派遣された。一九九七年に任務を終えて台湾へ帰って退職した後、すぐまたホンジュラスに戻り、一九九八年に台湾人がホンジュラス北部のフォルモサ工業区に建設する工場の準備に要請され従事するが、工場のオープン二日目、ハリケーンミッチに襲われた。道路は寸断され、多くの家が被害に遭い、彼自身も自宅へ避難していた。

張鴻才さんと親しい大使館の職員は、慈済が実地調査に来るためその案内を張鴻才さんに依頼し、また、税関への支援助物資の受け取りに同行してほしいと頼んだ。その後、彼は事業に専念して成功し、第二代目の台湾企業家会の会長になった。その間も慈済との関係は続き、いつの間にかホンジュラスにおける慈済の活動すべてを受け持つようになった。

牧童の涙

過ぎ去った辛い思い出は怒りの火となる。

野原に燃え広がれば、自分だけでなく他人にも害を与える。

愛の心を以て他人と接することを学び、苦痛だった体験を人生の糧にしよう。

昨年の九月、私は中国の青海省へ行き、そこで仁青卓瑪という羊飼いの少女を取材した。

仁青卓瑪の両親は彼女が幼い頃に離婚し、父親はチベット人の家庭に彼女を預けたままいなくなってしまった。彼女は学校へ行くこともできず、そこで牛や羊の世話をしながら、夜になると牛舎や羊舎に身を寄せていた。

ある日、子羊が逃げたため、彼女は飢えを忍びながら一昼夜かけて探しまわらなければならなかった。このチベット人の家庭にとって、彼女の価値は牛や羊にも及ばないのだ。

このような生活が九歳の時まで続いていたが、幸いにして、親戚が彼女を引き取ってくれた。そして親戚の援助によって初めて学校に通うことができた。しかし低収入世帯だったその親戚が病気になる、再び学校へ通えなくなってしまったので、今度は祖母に引き取られることになった。

毎朝目が覚めると、彼女は今日の一日をどのように生きていくべきか考えた。祖母との生活もまた貧しかったからである。学校へ持つて行く弁当は饅頭一つしかなく、それを同級生に見られるのが恥ずかしくて、昼食の時間になると学校の隅に隠れて食べていた。また服が汚れていると虐められることもしばしばあった。そして、今までの虚しい境遇への怒りが充満して、周囲の人たちに対して敵意を抱くようになった。卒業の頃には成績が良く高校に進学することもできたのだが、学費が払えないのであきらめるしかなかった。彼女は自分を捨てた両親を恨んだ。「私を育てる能力がないのになぜ生んだのだ」と。

青海地域には両親を亡くした生徒や、経済面の援助が必要な生徒をケアし



ている慈済ボランティアがいる。中学校の先生が仁青卓瑪を紹介してケアの対象に入れた。しかし、彼女は相手が何かを企んでいるか、または自分が売られるのではないかと警戒するばかりで、ボランティアたちがいくら優しく接しても受け入れなかった。それでもボランティアは一年余りにわたって根気よく寄り添ったので、堅く閉ざされていた心が徐々に開いていった。

ボランティアの盧雪霞は、「彼女はうちの娘と同じ歳です。娘が持っている物と同じ物を必ず彼女にも持たせるようにしていました」と言った。物質的な援助だけでなく、彼女を家族のように受け入れ、親として、時には友達として接していた。

大学進学の時、実母とのDNA鑑定が必要になった。だが、この人生の大事な局面に際して実母に検査への協力を拒否され、彼女はまた捨てられた悲しみを味合わねばならなかった。どん底に落ち込んだ彼女を、ボランティアは家族のように温かく接して慰めた。

取材の時はまだ彼女の心に癒されていない部分があり、過去について話す

時など、涙ながらに訴えた。それでも家族同様に接してくれている慈済ボランティアのおかげで、過去のような辛い状況はもう二度と起こらないと信じているようだった。暗いトンネルを通り抜け、大学生になった彼女は、これからの人生に希望を持ち、未来への期待に胸をふくらませている。

取材の際、とても感動したことがある。青海省の慈済ボランティアの努力である。ボランティアが初めて仁青卓瑪に会ったのは、彼女が全てに背し背を向けていた時期だった。だがボランティアは彼女を見捨てず、寄り添い導き、彼女の怒りが爆発寸前の時には、その心を癒し、慰めるように努めてきたのである。

彼女は今、大学のサークル活動に積極的に参加している。また、慈済の先輩に学び、ボランティアとして老人ホームの慰問に行き、自分よりケアが必要な人に寄り添っている。慈済からもらった愛のおかげで、彼女は今の自分を幸せだと感じる事ができたのだ。心に愛があれば、過去の苦難は今の自分を一層強くする励みになるものと、私はこの取材を通して強く実感した。

◆ 小事は大事

朝会の時、證嚴法師は『荷物は、背には負ぶわれ、肩には担がれる』と言われます。衆生はみな如来菩薩の肩や背中にずっしりと負ぶわれ、担がれたままです。如来菩薩を苦しめているということに、まるで

◎訳・葉美娥



気がついていません」と、胸をつまらせながら開示されました。

朝会が終わったあと、辺りは静まり返り、重々しい雰囲気に包まれました。

私は慈済青年会の先輩として、世の中の米俵を担ぐ思いで善行を行うと発心したつもりが、果たしてできているのか、それともずっと法師の肩に担がれる米俵になっただけではなかっただろうか、と反省しています。

その時「天使の姿」という大愛テレビ局のドラマを思い出しました。

それは、新北市八里区の粉塵爆発事故で負傷者を世話した看護師たちとその治療についての物語でした。



ある若い看護師は、自分をもっと大きな仕事を手伝いたいのにできない、それが辛いと悩みます。

すると看護師長は彼女にこう教えました。「尿バッグの取り換えや血圧を測ることが

大事な仕事だと思わないのですか？とても大事な仕事なのですよ。あなたがこの仕事をしているから、医師と看護師長はより多くの時間をかけて、もっと良く傷口の治療をすることができるのです」

私は大きな責任を担う能力がないけれども、暮らしの中の小さなことに対してきちんとするよう、心がけています。

たとえば菜食にする、「法の香に浸る」朝会に行つて仏法を聞く、環境保全活動に参加するなどです。

自分の務めを果たし、證嚴法師を心配させないようにし、慈濟という大家族の中で和氣藹々として前に進んでいけるように。さあ、みなさんも一緒に、喜んで勇気を持って善行を行う弟子となりましょう。

自在な心で奉仕するのですから、煩惱はありません。

今この時の因縁を大切にしましょう。

たとえささやかな仕事であっても、それはとても重要なのです。

❖ 作者：凌宛琪（お板さん）。慈濟基金会の職員で、毎朝の「法の香に浸る」朝会でPCなどの設備セッティングを担当している。そして自身の心得をイラストを添えてインターネットで発表し、分かち合っている。



（慈濟月刊六〇六期より）

それに、周りの人や物事に対しても、努めてプラスに考えていこうとしています。





【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願 絵・林淑女

この世に広く願をかけ
安らかに楽しく行おう

この五濁悪世で

四法を以って人心の浄化に努める

四法とは身安樂行、口安樂行

意安樂行、誓願安樂行

煩惱を起こさず

衆生と善縁を結び

愛の力を広めよう

世界自然保護基金（WWF）と国際

シンクタンク、グローバル・フットプ

リント・ネットワーク（GFN）は毎年、

人類による地球資源の消費量が、地球

が供給できる資源の再生産量を上回っ

た日を、アース・オーバーシュート・

デーとして発表しています。この統計

計画は一九九三年に発表され、年々そ

の日付けは早まっています。二〇〇三

年は九月二十二日、二〇一五年は八月

十三日、そして今年二〇一七年は八月

二日をもって、地球資源の消費量が供

給量を超過し、人々は借金生活を送る

ことになりました。

地球の人口増加にともない、森林と草原が減少する反面、ますます高く聳えるビルが林立し、自然生態が人によって作られる環境に変わっています。人類による森林破壊は、自ら自分たちの生存空間を破壊する行為です。気候は乱れ、地水火風の異常による酷暑や厳寒に耐えねばならず、万物生霊は安らかな生活を失い、穀物や野菜など、食物の成長も脅かしています。「因なければ果なし」と言われますように、人類がこのまま悪因を造り続けてゆくと、

その後にもたらされた苦果を自分で食することになります。

現代人は心の欲するままに、過度の開発と消費を行います。天然資源が絶えず物資の生産に用いられ、有用の物も無用になってゴミとして蓄積される悪循環により、地球が負わされた負債はますます厳しくなっています。

地球の資源が枯渇し始めている今、災難を減らすには、人々が身を以て始めなくてはなりません。資源を大切に、節水節電を心がけ、環境保全によって環境破壊を抑えるべきです。肉食

を減らし、素食を多くすれば、家畜による大地と空気の汚染を防ぐことができます。食欲はほんの一時のものですが、それが積もり積もれば、地球全体に影響を及ぼします。地球上では飢えに苦しんでいる人が多くいますから、食べ残しをせず、食糧を浪費しないよう心がけましょう。

人類には大地を護る責任があります。心の方向を調整し、生活様式を改めて、一人ひとりが節約して造福するよう励まし合い、気候生態が改善するように努めましょう。

相手に何かをあげるのではなく
もとより具わっている

慧命を目覚めさせてあげよう

マレーシアのロナントは、ペナン慈濟透析センターに通う患者です。毎週三回の透析は、一回四時間かかります。この時間を、彼は大愛テレビの番組を見て過ごしているうち、だんだんと心が落ち着いてきました。

以前は病気を事実として受け止めることができず、家族に当たり散らし、とくに息子には辛く当たってきました。

しかし、大愛テレビの番組を見て以来、慈済が提唱する仏教の智慧と愛は、聖書の中で学んだことと全く同じだと気がつきました。それ以来、短気を改め、親子関係がよくなり、幸せな家族になりました。

マレーシア慈済透析センターは、開業してから今年で二十年目を迎えます。慈善を行う因縁によって誕生しました。当時、ボランティアが訪問ケアを行っている中で、貧困家庭にとっては長期透析の医療費が高額であるため、さらに貧困に陥っていることが分かりまし

た。そこでボランティアは募金活動をして透析センターを建設しただけでなく、台湾へ帰ってどのようなすれば患者と医療スタッフに向き合い、質の良いセンターにすることができるか学んだのです。

マレーシアは多民族国家で、信仰心の篤い国です。慈済人は何の分け隔てもなく、生命共同体とみなして、困っている人がいれば、すぐに奉仕を行いました。そして設備の整った慈済透析センターでは、貧困患者に対して無料で治療を行うほか、患者の家族のケア

もしています。

患者は腎臓透析を受けるだけでなく、心まで清められています。彼らは慈済が誕生した当時の艱難な時代と、それ乗り越えた精神をよく知っています。また、世の中の様子もよく理解しており、愛の心を啓発してボランティアに参加し、人助けをするようになりました。

マレーシア慈済透析センターが二十周年を迎えるに当たり、ボランティアは隊を組んで厳かに参拝の儀式を行っていました。足元のわずかな広さの土地に明るい愛を敷きつめ、人々を正確

な方向に導き、その愛の力を発散させています。

ボランティアは患者に透析治療を施すと同時に、慧命をも啓発してきました。お互いに尊重し合い、相手に何かをあげるのではなく、人々にもとより具わっているたくましい力を引き出してあげているのです。

人々が自分の迷いを正すだけでなく、他人をも正し、そうして救った人が多ければ多いほど、救わなければならない人が少なくなります。あなた一人がこの世で奉仕すれば、さらに多くの人

が喜んで奉仕するのです。

正しい行動、正しい言葉、
正しい信念

幾久しくこの世で
人々を護るため志願を立てよう

新北市の板橋に住む王陳秀登さんは、今年で八十四歳です。開業して間もない花蓮慈濟病院で自動車事故に遭った十四歳の林伝欽さんを救った話を、三十年前に聞きました。

重傷を負った林伝欽さんは、下半身

がほとんどめちやくちやにつぶされていました。医師たちは細心の注意を払って手術を行い、とくに外科の陳英和医師は体の機能が失われないようにと、注意深く切断していたことを話しておられました。

王陳秀登さんは花蓮の出身でしたので、同郷の少女を助けようと思いました。そこで慈濟ボランティアを探して慈濟の会員になり、一九八九年には慈濟委員（慈濟の幹部のランティア）になりました。そして慈濟の医療志業をサポートするために、一日に三軒の会

社の食事を作る仕事を請け負い、時には孫をおぶって働き、得た収入のすべてを慈濟に寄付していました。

また、環境保全ボランティアにもなり、近所の人たちも手伝っています。そして老いても、パソコンを習ったり、いろいろな活動に参加したり、委員の養成に駆け回るなどしておられ、感動させられます。

《法華経・安樂行品》の中に出てくる身、口、意、誓願の四法を彼女は成し遂げています。身は善行、口では悪言なく正しい言葉で法を説き、知足善解、誠意を以てこの世に広く願をかけ、と

こしえに奉仕しているのです。

五濁悪世において説法を行うには、必ず身安樂行、口安樂行、意安樂行、誓願安樂行でなくてはなりません。生命の価値をよく理解して、この世を守護する志願をもって、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の「六度」に努め、励まなければなりません。

良い言葉は布施になり、人の憂鬱を解いてあげることができます。忙しい人にも手を差し伸べて手伝ってあげれば、相手の労は軽くなるのです。

この世で耐えなければならぬことは多々あります。日常生活の中で見る

人、事、物などのすべては堪忍を要します。悪言悪語を聞いても、あるいは利益にならない人や事に遭遇しても、それは相手が警告を与えてくれたのだと反対に感謝しましょう。自分にとつての修行であり、さらに精進していこうと思うこと。これがすなわち善解ということですよ。他人を善解するには、自分が常に勉強し修行を積み重ねるしかありません。

試練や苦しみに堪えられない脆弱な心では、修行は困難です。傲慢な驕りたかぶった心で、少しでも意のままに

ならないことを耐えられないと、悪が頭をもたげます。自分で警戒心を高めて、怒気を調和させれば、台風の前に防災対策を取るのと同じように、災難を最小限に抑えることができます。

衆生の恩に感謝し、人や物に接する時は気にせず、お互いに包容すると良い縁の累積になります。煩惱も無明もなく、人と良い関係になるのも修行です。「徳者得也」というように、衆生の心に入って、人を喜ばせれば、相手は話を受け入れてくれ、着実に奉仕ができます。お互いに影響し合い、「六度万

行」を無量無数に発揮させましょう。

愛は常日頃培う必要があります。菩薩の心とは大空を包み込むように広く、私の心に大衆あり、大衆の心にも私があって、まるで放射線のように発した光は愛のエネルギーを拡散させます。

心が乱れれば

過ちを冒して緩慢になる

時を大切にすれば

諸々の事が成功する

毎日の早朝に、静思精舎の本殿では、常住尼僧と信者が整然と並んでお経を

唱えています。「一日の計は早朝にあり」とはこのことです。空がまだ明けきらぬ早朝は、気温もまだ十分に上がっていません。この時間に、人々は同じ心、同じ動作を行います。一日で最も規律のある時間で、その空間には道の空気がただよっています。

午前の仕事が終わわり、昼食後に皆はもう一度集まります。修行者だけでなく、精舎の職員も、今何をしていようと、祈祷の音を聞くとすぐその手を止め、敬虔に手を合わせて心を落ち着けた後、午後からの仕事にかかります。夜もまた精進法があります。

心が散漫であると、仕事でも過ちを犯したり緩慢になりがちです。もしも時を掌握して、動作をほんの少し多くすれば、その分早く完了します。

心に執着心がないと、時は過ぎていき、痕跡を残しません。情、愛、物欲、名利に心が乱れると、規律を守れず軌道に順応することができません。

どんなに忙しくても、心は常に真理の中。仏の「四智」に学ぶこと。

●成所作智 環境や欲念に引っ張られず、知識を智に転ずること。

●妙觀察智 心して思考し、やっては

いけないことはしない。やるべきことは真面目に人々を利すること。

●平等性智 衆生平等とは「無縁大慈、同体大悲」を以て人々と共に志を成就させることを目指し、愛を普遍的にこの世に伝えること。

●大圓鏡智 諸法が明らかに、境地もはっきりすると、清浄な本性に帰します。

この数年来、トルコの慈済人はトルコ国内のシリア難民の世話をしています。六カ所の学校や施療センターも開設しました。今年の八月に、六カ月の孫を抱いたシリア難民がボランティア

に救援を求めてきました。孫の手足は生まれつき奇形で、手術が必要でした。彼らは至る所の病院を回りましたが、治療してくれる医師がいても手術費がなく、異郷では日々の生活さえ困難を極めていました。どうしても医療費を集めることができず、慈済に助けを求めてきたのです。ボランティアは緊急に医療費を提供して、手術を受けさせたので、この子は障害者ではなくなりました。

世の中の衆生は共生共存しているの
で、因縁があれば苦難に接触しても一時のことです。この子は将来、健康に

成長してゆくことでしょう。自分がどれだけ奉仕したかにとらわれず、また見返りを求めなければ、心は安らかなり、無限の喜びを感じることができ
ます。

成所作智、妙觀察智、平等性智から
大円鏡智に回帰するなら、毎日の生活の中に仏法が着実に根づいています。そうなれば、どの国に行っても真如の本性に返ることができず。修行には長い時間が必要ですが、もしも道理を「当たり前のこと」と見なせば、困難なことはありません。



権利より愛を

◎文・釋徳侃／訳・性

温かく柔らかな言葉で相手を思いやる

そうすることで受け入れられ、

共に重任を担うことができる

誓願を立てて広め、人の心も清める

中国・華西地域の七省、新疆ウイグル自治区、青海、甘肅、貴州、雲南、陝西、四川と重慶市のボランティアは、毎月四川省の成都で行われる慈誠委員の研修会に参加しています。ここに来るまでに、電車で二十時間以上かけ、車内で一夜を明かした人もいました。時間だけでなく肉体的にも大変なことだったにもかかわらず、皆は固い意志で毎月通っていたのです。

台湾で行われた全世界慈濟幹部精進研修会で、中国から参加したボランティアが、自分たちの感想を分かち合いました。證嚴法師は、「ボランティアは大愛の道を広め、途絶えることのない情を交わすことに尽力しました」と褒めたたえられました。「人々の心が寛大になれば、社会は愛に満ちて、必ずや平穩無事になることと信じています」と法師はおっしゃいました。

「この世の苦には、物質が不足している苦、それから人間関係が原因の苦などがあります。また、他人は自分に借りを作っているという思いを持ったり、貪欲に執着したりすることは、『求不得苦』（求めても得られないことからくる苦しみ）です。ですが、苦しい時間は短く、時は飛ぶように過ぎていきます。不満や苦しい思いにいつまでもこだわっていると、本当に耐え難い苦しい人生になるでしょう」

法師は、「身口意（動作を行う身と、言語を発する口と、精神作



用を行う心」の誓願を立て、広め、実行に移し、良い話だけを伝えて、真心で人を愛するように」と皆を励まされました。「ボランティアが苦難にある人に付き添ったり、導いたりすることを私は嬉しく思います。私が一番成すべきことと、愛すべき人に、皆が代わりに尽くしてくれています。山や海によって遠く隔たれていても、師匠と弟子の心はいつも一緒です。皆が私と心を同じくして、末長く寛大無尽の菩薩道を広めてゆくことを願っています」

経は道理で、道理は道である

午後、法師は引き続きボランティアと座談しました。法師は、「法の香りに浸りましょう」と皆を励まされました。「仏法を受け入れ、慈済の理念を理解して、それを人に接するときに応用しましょう。すなわち、経文から得た知恵を実行に移すのです。そし

て聞いた法を心に止め、大衆の中に入って法を伝えるのです。統理大衆の徳行を以てこそ、他人を導くことができるのです」

また法師は「統理大衆とは、威を振るうのではなく愛を込めた心にあります。たとえ、自ら大きな願を立て奉仕しようと勢い込んでいるでも、他人に対しての思いやりの心や、温和柔順な言葉がなければ、いくら道理があっても通じなくなるでしょう。ですから、人が後についてきて一緒に衆生の利になることを行うようにさせるには、人の心を動かさねばなりません」と指摘されました。

中国が一路経済政策を推進していますが、法師はこの言葉を引用して皆を励まされました。「伝統的な倫理道徳を一路に引導すべきです。あらゆる道路を通すように、どこでも菩薩道を切り拓いてゆくと、たとえ、道のりが長くても、コツコツと積み上げた愛で着実に進んでいけることと思います」

近年、難病に罹った中国の患者が、台湾の慈済病院で治療を受



けるようになりました。治療後故郷に帰ってからも、現地の慈濟ボランティアが引き続き寄り添っていたので、心身も生活も共に改善しました。上海の呉さんは若年性パーキンソン病のため、手足が知らず知らず震えていたのですが、今年の二月、花蓮慈濟病院の医療チームにより治療を受け、症状が改善されました。

六月に、大愛テレビ局のスタッフは呉さんを訪ねました。呉さんは、すでに階段を自分で下りて来られるまでに回復していました。それに毎日必ず慈濟の会所で「法の香りに浸る」朝会に参加し、会所のドアを開け、パソコンや器械設備にスイッチを入る係を務めていました。

「このことは慈濟病院の医療チームが努力した成果ですが、これからもボランティアたちが付添って、リハビリを促すことが大事です。ボランティアはまさにこの世の菩薩と言えましょう。衆生を愛し、支援の必要な人がいれば、その縁を大切にして一緒に

困難を乗り越え、自立できるまであきらめずに付き添うのです」

「誓願を立てて広め、すべての衆生の済度を願う。これこそが慈濟宗門人間路なのです。菩薩は愛を以て菩薩道を他人の心まで敷かなければなりません。衆生が菩薩道を歩むようになると、彼らはさらに多くの迷いや苦しみを持った人を済度するのです。静思の法脈と慈濟宗門は、私たちの世代が創立しました。ですから私たちは、後についてくる人が安心して前へ進んでいけるために、菩薩道を切り拓き、舗装したのです」

「私に向かつて、皆は、『法の香に浸る』と願を立てていました。実際、毎朝の朝会という時間は自分にとって説法をするべき時間です。弟子たちが聞くか聞かまいかは、師である私には関係のないことです」「仏法を聞かなければ、この菩薩道は歩みにくく、凹凸があって通れないでしょう。もし仏法を心に収めれば、自ずと菩薩道は平坦となるので、より多くの人を迎えることができます。皆さんも仏法の実践を心がけましょう」

笑顔を取り戻した観音様

毎年四月二十二日は世界地球デー。環境保護運動に携わる世界各地の人は、その日に特別な環境保護活動を行い、より多くの人が参加することを望んでいる。新北市観音山の山頂、硬漢嶺周辺には、斜面の広い範囲に渡って二十年間、ゴミが捨てられてきた。それは驚くほどの量で、いつにな



っても解決されなかった。ここ数年間、少数の人が一念発起してゴミを山から運び出していたが、それは微々たるもので、全体の汚染状況からすると遠く及ばない。

世界地球デーに呼応しようと、北区慈済ボランティアは今年四月二十三日に、いくつもの慈善団体と合同で第一回観音山清掃活動を行った。ゴミの量が余りにも多かったため、五月二十一日に再び二百五十人を動員して行われた。その二日間の清掃活動では、数多くの民衆が手伝いに集まり、ボランティアと協力し合って斜面のゴミを残らず拾い出し、リレー式にゴミを山麓まで運んだ。観音山で清掃活動が行われると聞いて、「苦を聞きつけて救いの手を差し伸べる」ように、自主的に手伝いに来たのである。活動は環境を改善するだけでなく、観音山の長年の問題を解決した。正に感動に値するものであった。

一歩一歩を大切に

新北市の淡水河の西岸に位置する観音山は、海拔約六百メートルの山である。高いとは言えないこの山は、自然のままの環境と豊かな森林を有するだけでなく、登山道に入ればしばし雑踏と憂いを忘れさせてくれる。山頂の硬漠嶺に着くと、台北盆地が一望に見渡せるため、観音山は昔から北部の人々にとってハイキングや登山の格好の場として親しまれてきた。

観音山という名称は、観音菩薩が仰向けになった姿に似ていることから名付けられたと言われる。それ故、登山道に入り、林の中を通る時、観音菩薩に近づいたような気持ちになる。大地とふれあう時は一歩毎に敬意を払い、大切にすることを。大切にする気持ちは、私たちに警鐘を鳴らしているように感じられる。大地は私たちの体と同じで痛みには耐えられないため、大切に愛護すべきである。一旦傷つくと、健康を取り戻すのは容易ではないかもしれない。





噂に聞いたゴミの滝

観音山に登る前から、硬漢嶺近くに「ゴミの滝」があると聞いていた。実際にその場に立ってみると、目の前の光景が信じられなかった。何十年も堆積してきたゴミは、ずっと前から完全に土地を覆い隠していた。草は一本も生えておらず、木の根っこもゴミに埋まって、正常に地中の養分を吸い上げられなくなり、動物も近づくなくなってしまった。

以前、山頂には物売りがいて、軽食や飲み物を登山客に売っていた。当時、人々には環境保護の意識がまだなかった。一部の物売りや登山客が、ゴミを



そのまま山の斜面に捨てたため、今のような光景になった。そのゴミの山には大量の使い捨て食器や飲料缶、ビニール袋が混ざっており、そのほとんどは自然分解しないものである。山がどれだけ傷ついたか想像に難くない。そういう光景を見て、理解できないことがあった。人々は山を愛し、大自然の中で森林浴に浸ろうとして、休日に家族や友人とハイキングに来る。だが、人間が出したゴミの中で、樹木はどうやってフイトンチッドを出すことができるのだろうか？

どんなに汚く困難でもしなければならぬ

事実、観音山のゴミを清掃するのは容易なことではなかった。急な崖に加えて連日の雨で地面はぬかるみ、前進するのも難しい状態だった。少しでもバランスを崩したら下の方に滑り落ちてしまう。そのため、現場のボランティアは命綱を体に縛りつけて、事故が起きないようにしていた。困難はこれだけではない。長年捨てられたゴミは湿った泥と混ざって固まり、

ゴミを拾い出すだけでも大変だった。その上、断続的に腐臭が漂ったが、清掃ボランティアの決意を揺るがすことはなかった。始めたからには徹底して行こう。ボランティアは一つひとつ回収できる物まで分別し、極力ゴミの量を減らした。

法師はいつも私たちに、「大地は私たちの母親のようなものだ」と言っている。そう、この土地は母親が重責に耐えるように、長年人類が傷つけてきたのを黙々と耐え、一言も文句は言わない。その日の清掃作業はとても大変だったが、ボランティアは頑張って任務を完遂した。その行動は、大地の傷を癒し、健康回復に努めているようだった。



一手が動けば千手が動く
観音山の硬漢嶺から下山するには登山道を下るしかない。交通手段を使うことはできず、片道三十分かけて、平均重量三キロから五キロの袋を持って下山しなければならぬ。人が多ければ一列になってリレー式に運ぶこともできた。中には両手に一袋ずつ持つてゆっくり下りる人や、体力に自信がある人は一度に袋を三つ背負い、両手にも一袋

ずつ持つて下っていた。また、知恵を働かせ、竹竿で四、五袋肩に担いでいた人もいた。

活動現場で手伝った人たちは十歳から九十歳まで年齢も様々だ。慈済の環境保全ボランティアも参加し、早朝落ち合ってバスに乗って観音山まで来たり、バイクで来ていた。しかし、観音山に着いた後は皆、年齢や体力を克服して、同じように歩いて山頂まで登り、清掃活動を手伝った。また、下山する時も数袋持つて下りることを忘れなかった。

清掃活動当日は週末だったため、数多くの登山客やハイキング客が訪れていた。ボランティアたちが汗を流し、全身泥まみれになってゴミ掃除に健闘する姿を見て感動し、自主的に手伝い出す人もいた。人の心は啓発することができる。善行は誰かが先頭に立つて行う必要があるのだ。というのも、一人の力は微々たるものだが、たくさん集まって一緒に行えば、間接的に別の人に感動を与え、参加してくれるようになる。それは最も美しい善のさざ波の広がりなのである。

長年の重荷を担ぐ

今回の活動は北海岸・観音山国立景観地管理处が主催したもので、北区慈済ボランティア、アジア形上背水チーム、我が地球を護る会、ロータリークラブ、登山常連などの各団体が清掃活動に参加して、約四千袋のゴミを回収した。数十年前から何気なく捨てられてきたゴミのために、数十年後、千人を動員し、二日間かけて初めて大地は呼吸できるようになった。何気なく捨てたゴミが見えなくても、ゴミはそこに存在する。いつまでもなくならないから、次の世代の人が清掃しなければならなくなる。まるで子孫に借金を残すようなものである。私たちが一歩踏み込んで、人の立場になつて考えれば、このような「ゴミの滝」が出現することもなく、これほど多くの人を動員して清掃する必要もなくなるかもしれない。

同じ台湾に住む他の人は、今回の清掃活動に参加していなくても、皆でその日に頑張ってくれた人に感謝すべきだと思う。彼らは皆のために数十年間の重荷を担い、大地を己の体と見なし、愛で以て山林の健康を護ったおかげで、長年ゴミに覆われていた土地に光明が射したのである。



慈濟大事記九月……………

訳・済運

09・01	◎慈濟基金会はシエラレオーネ共和国の水害被災者のために、台湾から毛布7000枚とマイ食器10000セットを輸送した。 ◎慈濟アメリカ総支部はハリケーンハービーの被災者向けに、40キロの即席飯と239枚の現金カード及び500人分の救急医療用品などの物資を整備した。黄漢魁執行長と曾慈慧・慈発室主任、葛挙賢・行政秘書室副主任ら11人の災害支援第一チームが1日から3日までの間にテキサス州ヒューストンに到着し、現地ボランティアと合流して物資配付活動を展開した。
-------	---

09・02	慈濟基金会はアメリカのハリケーンハービー災害を支援するため、2日、台湾から580箱の即席飯をテキサス州ヒューストンに向けて空輸した。
09・04	アメリカテキサス州オースティンの慈濟ボランティアは4日、ラグランド町に向いてハリケーンハービーの被害状況を調査し、9日に186世帯の被災者に現金カードと毛布を配付することを決めた。住民の大半はメキシコからの不法移民である。
	◎慈濟慈善事業基金会は健行科技大学と合同で、「ドローンによる災害調査と資料整理に関する研究討論会」を桃園市の健行科技大学で3日間開催し、50人が参加した。慈濟の災害緊急支援時における調査や、災害支援での安全性と効率を、いかにして上げるかについて意見が交わされた。

09・06	花蓮慈済病院は衛生福利部認知症合同ケアセンターの設立を計画している。花蓮県内の他の病院や団体と合同で、認知症患者と介護人に対し、介護に関する情報や相互間の調整、転院及び認知症と疑われる患者の診断や医療ケアなどを提供する。今日、花蓮県衛生局で運用開始式典が行われた。
09・08	カテゴリー5のハリケーンイルマが6日、カリブ海の島々を襲い、中でもセントマーティン島の被害が最も大きかった。オランダ領のセントマーティン島南部からの慈済ボランティアが8日、緊急災害支援活動を展開し、食糧と米を配付した。ハリケーンがアメリカ・フロリダ州に接近していたため、慈済マイアミ支部のボランティア4人がエバングレーズ高等学校に出向き、赤十字社が設置した避難所で名簿登録の作業を手伝った。

09・09	アメリカ慈済ボランティアはテキサス州でハリケーンハービー被害の第1回物資配付活動を始めた。この日、リッチモンド、ローゼンバーク、ビューモント、ポートアーサーで被災した住民と警察、消防隊員に毛布と現金カード、即席飯、医療パックを2回に分けて504世帯に配付した。
09・10	◎高屏区慈済人医会と内政部移民署が東港区漁業組合で外国籍漁船乗組員に対する施療活動を行った。眼科、歯科、皮膚科などの診察と多項目の健康診断を100人以上が受けた。 ◎アメリカ・テキサス州、ハリケーンハービー災害支援チームは今日、ヒューストン、グリーンポイントで物資の配付活動を行った。現地の不動産会社の協力によって作成された被災者名簿を下に、232世帯の低所得者とメキシコ系、アフリカ系住民の被災者に現金カードと毛布、即席飯を配付した。また、ディキンソン市政府ホールでも、被災

09・13	◎アメリカ・フロリダ州オーランドの慈済ボランティアはウィンターヘイブンに向き、ハリケーニルマで被災した慈済ボランティアを見舞うと共に家の清掃を手伝った。 ◎11日深夜、高雄市国道1号線の岡山インターチェンジ近くで長距離バスによる重大な交通事故が起き、6人が死亡し、11人が負傷した。慈済高雄支部は知らせを受けて見舞い活動を展開した。ボランティアは秀伝病院、高雄空軍病院など7つの病院に負傷者とその家族を見舞った。3日間に延べ49人が動員され、3家族に見舞金を届けた。 アメリカ・テキサス州のハリケーンハービー災害支援チームはグレートヒューストン地区で被災したベトナム系住民の居住地区を見舞った。13日から15日の間にフアティマ、サンタム、セントジョセフなど
09・12	

09・11	した現地の警察官と消防隊員117世帯に配付が行われた。 ◎慈済基金会と屏東科技大学及びオーストラリアのチャールズ・ダーウィン大学は11、12両日、屏東科技大学で「災害リスクの低減と復興」をテーマにした国際学術討論会を共催し、7カ国15人の学者が参加した。災害の予知と被災後の復興に関する実務経験及び最新の研究成果を交流することで、将来の災害リスクの低減における作業効果を期待している。 ◎アメリカ慈済医療基金会はハリケーンハービー被災地の医療ニーズに応えるため、本日、1台の大愛医療巡回車をカリフォルニアから出発させた。13日夜にヒューストンに到着する予定である。2005年のハリケーンカトリナ of 災害支援に続いて、再び大愛医療巡回車を西海岸からアメリカ中部に送って医療奉仕する。

09・15	黄思賢・慈済ボランティア世界総指揮と慈済テキサス州支部の黄太山執行長らはテキサス州の華僑実業家の李雄氏の紹介で、ヒューストンのシルベスター・ターナー市長と面会し、ハリケーンハービー被災者を支援する意向を述べ、他の地域の災害状況についても話し合った。	を訪れ、236の弱者世帯に現金カードと毛布、即席飯を配付した。
09・16	◎マレーシア・クアラルンプール慈済国際学校の起工式が行われ、4000人が式典に参列した。 ◎アメリカ・テキサス州のハリケーンハービー災害支援チームはデイキンソン市で大規模な配付活動を行い、2348世帯の被災者に現金カード、毛布、即席飯が配付された。それはアメリカ慈済史上一度に配付される世帯数の最多記録となり、当日、211人のボランティア	

09・17	アメリカ・テキサス州のハリケーンハービー災害支援チームは本日、初めてウォートン地区で599世帯の被災者に物資の配付を行った。		
09・19	アメリカ・テキサス州のハリケーンハービー災害支援チームは19日と20日、ヒューストン警察庁とハリスカウンティ警察署で合計1000枚の現金カードを被災人員に配付した。		
09・20	慈済骨髓幹細胞センターは初めて骨髓造血幹細胞をベトナムに届けることになった。慈済が骨髓を届ける31番目の地域となる、本日、花蓮慈済病院からベトナム・ホーチミン市衛生署輸血病院の人員に引き渡される。		

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002
花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 台北県新店市建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中県潭子郷豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
FAX: 886-4-36021123
慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301
FAX: 886-3-8563604
台北支部
106 台北市忠孝東路三段 217 巷 7 弄 35 号
TEL: 886-2-27760111
FAX: 886-2-27761244
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ
総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885
カナダ
TEL: 1-604-2667699
メキシコ
TEL: 1-760-7688998
ドミニカ Santo Domingo
TEL: 1-809-5300972
ブラジル Sao Paulo
TEL: 55-11-55394091
イギリス
TEL: 44-20-88699864
フランス
TEL: 33-1-45860312
ドイツ Hamburg
TEL: 49 (40) 388439
オランダ Amsterdam
TEL: 31-629-577511
スウェーデン Goteborg
TEL: 46-31-227883
オーストリア Vienna
TEL: 43-1-7346988
南アフリカ Gauteng
TEL: 27-11-4503365
中国蘇州
TEL: 86-512-80990980

香港
TEL: 852-28937166
フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001
タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3
ベトナム Hochiminh
TEL: 84-8-38535001
ミャンマー Yangon
TEL: 95-1-541494
マレーシア
Penang
TEL: 604-2281013
Malaka
TEL: 606-2810818
シンガポール
TEL: 65-65829958
インドネシア Jakarta
TEL: 62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL: 62-21-50558889
スリランカ Hambantota
TEL: 94 (0) 472256422
ヨルダン Amman
TEL: 962-6-5817305
トルコ Istanbul
TEL: 90-212-4225802
オーストラリア Sydney
TEL: 61-2-98747666
ニュージーランド
Auckland
TEL: 64-9-2716976

慈済

2017年10月19日発行・250号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴
発行所 慈済基金会
〒112 台湾台北市北投区立德路2号
編集 慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・王麗雪
校閲 山田智美
電話 (886)02-2898-9000
FAX (886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈済基金会日本支部
〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16
電話 (03)3203-5651 ~ 5653
FAX (03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いです。 (日文組編集同人)



どんなに汚く困難でもしなければならない

4月22日の世界地球デーに慈済ボランティアはいくつもの慈善団体と合同で第1回観音山清掃活動を行った。山頂の硬漠嶺周辺には、斜面の広い範囲に渡って、20年間、ゴミが捨てられてきた。急な崖に加えて連日の雨で地面はぬかるみ、前進するのも難しい状態の中、参加者はゴミを残らず運び出した。（撮影・黄筱哲）

